

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
京都市左京区田中大塚町49  
075-701-3164

## 迎春

1994年1月1日

### 洛友会役員

常任幹事 常任幹事 北海道支部長 東北支部長 北陸支部長 九州支部長 四国支部長 中国支部長 中部支部長 関西支部長 東京支部長 副会長 副会長 副会長 副会長 常任幹事	矢木原邦雄	岡田隆夫	池内義則	三上端五	川田保昭	上越孝之	船越健一郎	松谷健一	大野昌彰	藤島良啓	武藤良文	池上幸夫	大嶋重一郎	卯本重文	近藤泰治	大谷泰之
--	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------



## 新春・新時代に想う

第一部 明るい心のリストラ時代に向って  
第二部 洛友会総会巡りよもやま話

会長 大谷泰之

### 第一部 明るい心のリストラ時代に向って

一九九四年の新春を迎えて、先づ新年のご挨拶を申し上げますと共に、会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

さて本洛友会は、設立42年目を迎え、今春の新人会員を加えて会員総数(居所判明)は六千名を超えた。また本部事業として昨年12月に会員名簿および会報(季報)の刊行。東京、関西等の七支部では総会、旅行会その他の各種行事の実施等が活発に行われている事は他教室では例を見ない処である。

これ全く会員始め本部、各支部役員の皆様の奉仕的なご協力ご支援の賜であり、特に隔年毎の名簿の広告募集には、不況時代にもかかわらず大体例年に近い成果を得ることが出来た事に対して心からのお礼を申し上げる次第である。

ここで新春卒業の新会員の諸君にお慶びと歓迎の言葉を申し上げますと共に、特に最近の長期不況と

大変革新時代に対応して、たくましく、タフな忍耐強い自立かつ自律精神をもって、おおらかに頑張っ行って行かれる事を希望したい。そして今誰に感謝すべきか、そして新時代に対応して如何に生きて行くかを改めて考える時を持つて頂きたい。

次に若干堅苦しい話に移るが、昨年を回顧すると、一昨年にも増して、世界的にまた歴史的にも大変革。大激動の年であった。政治、経済、産業、社会、自然現象その他の各界において混迷(カオス)を極めた。

地球自然界を見ても、日本の冷夏、多雨や米国中南部の大洪水その他「まさか」の連続であった。特に我国ではバブル崩壊に伴う不況の上に、円高、前記異状気象等に基因する景気の低迷、底ばい状態が長期化し、コメの不作、輸入コメ泥棒と言った暗い報道が紙面の中心となっている。特に産業界の暗いリストラ(リ

ストラクチュアリング、即ち再構築、これに伴う公共事業の遅延等により、第二次石油不足を越える戦後最長最悪とまで言われる複合不況、カオス不況、心理不況、さらに消費者の不況感(消費行動も3K、けちで賢く格好よし)とか、企業経営陣の不況対策として3K(広告費、交際費、交通費の削減)等の文字が毎日紙面に見られる。然し経営者の心理的要因で不況感が増幅されているように思われるが、悪い／＼と手をこまねいておらずに何とかして不況脱出を図るべきであろう。

前述の企業の雇用調整と言えは人員削減に伴う出向、配置転換、定年退職者の不補充、希望退職者募集等の上、新卒者の採用中止または削減等全く大切なリストラ人材の受難時代になっている。

ピンチの後にチャンスありと言われる。暗い面だけを見るのではなく、少しでもプラスサイドに変わる兆しを評価し、明るい展望を開いて行く努力の継続が、今こそ大切であると思う。今は明るく良いリストラ変革へ向う時であり、想像力と創造力を育成し、世界の未来のため今何が出来るか、真剣に模索する時であらう。何れにしても今の不況時こそ、大変革、新時代への挑戦のチャンスであらう。

以上述べてきたように最近ではリストラと言えは、暗い面だけが報道されているが、次に明るい前進的なリストラ時代、所謂リストラサバイバル時代への前進に就いて考えて見た。

リストラ前進には勿論自助努力が前提であり、時代の変化に対応した革新的新製品、技術、サービス等を提供するという自助努力が必要であり、今までの経営や組織の見直し改革や新分野へ挑戦して行く姿勢が大切である。既に一部では半導体や液晶関係で新製品の開発も進んでいる。

我国ではご承知の通り、政界では数年来国会の大争点であった政治改革問題が、新政権に移って約100日目に衆議院で小選挙区比例代表制法案が可決された。

また新首相の私的諮問機関「経済改革研究会」平岩座長のレポートの中間提言が公表されたが、規制緩和、許認可等の国家のリストラを目指す数十項目が挙げられている。問題はこの種のレポート内容を神棚に上げておらずに政府が着実な実行を国民に約束し、進捗状況を監査検討する機関を設けず不転の決意を示してほしいものである。

また11月12日に経企庁から93年度国民生活白書(心豊かなふれあいを求めて)が発表された。その

内容は長期的には高度成長による生活水準の向上によって、短期的にはバブル崩壊後消費が堅実になり、モノより心の豊かさを重視し始めたとの認識を示している。人々の交流の場である家庭では家族夫婦揃って余暇を楽しむ、また職場では自由時間の増大もあって会社人間から脱皮し退職後の生きがいを失うことがないように、若い内から職場以外の交流の場を作る。また地域でのボランティア活動は30%位になるが、それでも米英に比し少ない。自然とのふれあい、人と人とのふれあいの手段は共通の趣味や関心事に基づく自由縁に今までの血縁や職縁に移るであろう等と述べている。これからの社会の傾向として皆様もじっくり考えて見る必要があると思われる。

更に政府税制調査会が11月19日不況に対する税制改革案を提言した。「公正で活力ある高令化社会を目指して」との副題付きで大形所得減税と消費増税を柱とした中間答申内容を公表した。21世紀の高令化社会を見据え、働く世代の負担の軽減を主眼としたものである。今年度からの若干の減税効果は期待出来ると思われるものの、国会審議の見通しも不透明であり、また一方において行政改革や歳出の見直しも大切であると思われる。

次に表題にも書いた心の問題について思いつくま、に述べたい。多年教育分野に関係した筆者は特に福井高専校長時代に、心の教育面から、思いやり、優しさ、心の豊かさ、感謝の心、和信敬愛の心、更に倫理感等の大切さを学生によく話をしてきた。それについても既述の通り近年、政治経済産業社会等の一部で、この倫理感の欠如による事件現象の暗い報道が多い事は真に嘆かわしい事である。現代社会では科学技術の進歩により物質的には豊かになり、飽食による体の栄養は充足しているが、心の文化を涵養する栄養分の摂取は極めて不足して「心の栄養失調」を起している人が多く「衣食足りて礼節を知る」でなく「衣食足りて心寒し」ともいうべき社会になっている。この最大原因は科学技術と心の文化とのアンバランスその他によるものとも考えられる。倫理と言えはスポーツゲーム論と経済倫理との間の競争の倫理について興味ある記事があった。スポーツゲームには八百長その他のルール違反が時々見られるが、産業経済界にも贈収賄、詐欺商法、環境汚染、談合カルテル等のルール違反が最近目立つ事が多い。難かしい面もあるが、やはり心の倫理感を重視したいものである。

注1 学士会会報一九九三年III (800号)一橋大学塩野谷氏による

# 迎春

一九九四年一月一日

京都大学

電気関係教室

教官 一同

財団法人

関西電気保安協会

理事長 矢森 智

フジテック株式会社

取締役社長 内山正太郎

シャープ株式会社

松下電器産業株式会社

筆者は比較的自由時間が多く脚腰が不自なため、TV生中継によるスポーツゲーム観戦を、それに伴う感激的ドラマ画面を楽しんでいる。年六場所の大相撲、春夏の全国高校野球やプロ野球それらに昨年からはブームになったプロサッカーJリーグ戦、ゴルフ、駅伝、マラソン、ラグビー、アメリカンフットボール(ルールは若干判り難いが、関西の大学戦では京大チームの優勝回数が多い、残念ながら昨年11月21日の対関学戦で京大は優勝を逃した)等々アマ、プロゲーム、その上深夜の衛星中継を合せてと我国ほどスポーツTV中継の多い国は少ないと思われる。

次にゴルフと心についてのあるプロの話述べる。ゴルフを楽しむでおられる会員は体験済の事と思うが、ゴルフほど奥深い精神的なスポーツは少なく、心の緊張、不安等が高まっている時には集中しようと思えば思うほど逆効果になる。少し不安になるとOBになるかなとか、パッティングラインを外すのではと思ったり、色々なイメージが出てきて結果はその心配通りになる。一方では今日はいやにカップが大きく見るとか、フェアウェイが広いとか感じる時は好スコアになる。何れにしてもゴルフは心のコントロールの競技と言えられる。

前にも書いたが京大アメフ部の水野監督は選手は成功するというイメージを持ってゲームを重ねると段階的に上達するものだと話している。

またあるマラソンランナーによると、脳波の活動が集中しリラックしている時にα波が検知されるが、このα波が出る時に理想の走りをイメージして、それを繰り返すと本番の時にイメージ通りの走りが出るのか、このイメージトレーニング法は試験や重要なスピーチの前にも使えるのではないかとの話もある。

次に心の健康と快適人生と題するある音楽関係者の話を引用し、ストレス社会での快適な過ごし方について述べたい。まず(1)ストレスは人生のスパイスである許容量以内の良性ストレスは必要であって生産性も上り健康も維持されるが、それ以上の悪性ストレスは健康上有害である。(2)それを見分ける一方法として脈拍によるセルフチェック法がある(平常は一分間60〜75なら健康でそれ以上が一、二週間続くと問題であり医者診断を受けること)次に(3)ストレスの自制法については経営者の方で仕事に興味だと言われる方が多いが、労働省の調査では週休二日1800時間として40年間働く労働時間は約7万時間、人生80年として持

ち時間は約70万時間、働く時間はたった10%、残り63万時間の内生活時間を引くと余暇は21万時間となる。この時間を「TVでゴロ寝人生」というのでは余りに寂しい。退職引退後20年を楽しく過ごすのは人生の大テーマである。

(a) ストレスを貯めないよう人生の中に趣味をもつこと。  
 (b) 心友を持つこと。  
 (c) 心の若々しさを保つため美しいものに感動し好奇心を旺盛にしておくこと。

「まだ50才も50才」心の持ち方で大きい違いがある。そのためには言葉の花束帳を作ること、心に「いいん」と感動を与える言葉のノートを自作し落ち込んだ時々にノートを開くと励まされる。

一度だけの人生を幸福にするためには意識を変えることが先づ大切で意識↓行動↓習慣↓人格↓人生とその人の幸福に繋がり、これが人生の成功哲学であると結んでいる。(以上京都市中小企業だより93年11月より引用)

高令化時代の心の健康についてあれこれ取材した話を次記する。人生80年時代、決して一身一生活と思つてはならない、むしろ人生は長く時代は短い、一身三世位は覚悟すべきであろう。激変する新時代に適応した人生設計が大切である。

人生80年時代を如何に楽しく豊かに生きるかというライフプランフォーラムが京都で開かれた。夫婦二人だけの期間が人生の半分にもなる。経済的な量だけでなく人生や暮しの質が問題になる。出生率が1.5という少子社会では老いて子供から自立する。特に男性の方が問題は深刻で自己管理能力の向上が大切である。心の豊かさや求められており、金で買えないものを大切に生活設計を考へること。欧米式の人生の前半は収入から貯蓄(生産期間)後半は消費期間と考へること、自己や仲間、ふるさとを創る。自分で創る自分の人生と思ふこと。

人生80年時代、定年退職後は余生でなく本生と言へる。その気持で人生のリストラが大切である。若い時代から夫婦で「50才からの青春」というライフデザインが大切である。

体の健康の話になるが日本病院協会の調査によると、従来の血糖値異状や高血圧、肥満が減少し逆に肝臓機能障害、高脂血症が男性に多くなっている。これはストレス防止のための酒の飲み過ぎかも知れない。勿論地方により食生活、生活風土、習慣の違いもあるようである。

飽食時代の現代、加工食品の多食や誤ったダイエット、偏った食

# 迎春

一九九四年一月一日

## ◎日新電機株式会社

代表取締役会長 田中 康夫

## 株式会社 S C C

代表取締役社長 松尾 三郎

## 宇宙技術開発 株式会社

取締役会長 松尾 三郎

## 電子開発学園

理事長 松尾 三郎

## 高周波熱錬 株式会社

代表取締役社長 大谷 茂久

事が問題であり、ビタミンC Bの欠乏症として高令者の物忘れ若者の脚気があり、薄毛や白髪は遺伝やストレスと並んでCuやZnの不足が原因で魚介類を食べることが大切で、Ca不足は老人の高血圧、動脈硬化、骨粗鬆症の原因である。

ビタミンと言えは読み書きは心のビタミンとも考えられる。特に脳の老化防止、物忘れ防止法の一つである。所謂読むだけよりモノを書くこと、新聞、雑誌、図書等の誌面を好奇心、憶える意欲をもつてコマメに考え、纏め、書きとめることが大切である。日記や絵、俳句、短歌等も役立つことは当然である。筆者は朝の内に二、三時間朝夕刊三紙に目を通し出来るだけ切抜き、更に紙片にキーワードや要点を書き留めて、また数種類の定期購入雑誌を暇な時間に同様に処理して、時にはワープロに入れて置くよう努めている。元々整理下手なので取材資料は溜る一方で、いざ原稿を纏める時にそれが仲々見付からないことが多い。またカメラで時々花や風景、時には人物集合スナップ写真を撮っているが、物忘れ防止や記憶対策として記録、再生、保存の三段階は丁度写真のプロセスと比較できる。物忘れがひどくなると始めから肝心のフィルムがカメラに入れてなかったり、写真のフィルムや原板が見付から

なかったりすることが多いので困っている。

ワープロやパソコンを使っておられる高令者の方も記録したフロッピーディスクの整理、読み出し原稿作成等にハンディを感じておられると思う。漸くワープロが何とか使えるようになった筆者でさえ整理下手が手伝って仲々フロッピーが見付からない事も多い。情報化時代に少しでも遅れないよう追いかけることは至難であるがこれも脳の老化防止に役立つと思っている。

尚筆者個人の事許り書いて恐縮であるが、大学定年後の約15年間仕事の関係で体の健康は元より心の健康上もストレスに悩まされる事が多かった。特に長年月関係している(財)近畿地方発明センター(科学技術庁所管)の理事長を故松田先生の後任として努めているが、約20年以上も懸案となっていたセンターの裏側にある自動車整備工場の明渡請求問題を筆者が原告として裁判に提訴し約5年間に8回の調定訴訟、18回の本訴訟の結果(その間筆者は3回証人台に立った)昨年3月末に和解解決し、次にその立退き跡地に車の駐車場を設置運営出来るようになり多年の大懸案も苦心の末落着した。専門外である民事訴訟も事務局局長藤村俊一氏(洛友デルタ会11年卒)共々

始めて勉強し数十回筆者と二人で京都地方裁判所や二人の弁護士事務所その他へ通った事や、センターで何回と理事会や各種委員会との打合せを開催、また科学技術庁での会議にも出席した事、その度にワープロによる議事録の作成追加等走馬灯の如く今でも心の中を過ぎて行く。この様な多年の重荷、ストレスも現在では殆んど解消して漸く気は長く、心は丸く腹を立てないと言う穏やかな心境に辿りつく事が出来た次第である。

もつとも長年苦勞を共にした藤村氏はその疲勞も手伝って11月上旬に高脂血症による脚部の血管手術で京大病院心臓血管外科に入院されたが11月下旬から復帰され安堵している。

人生80年代、昨年春80才を迎えた筆者の同期生の卒業55周年記念クラス会(13年卒)が別稿の通り10月3、4日(能登半島巡り)行われた。懇談会の席上では80才にしては元気の良い多趣味の明るい話が多かった。ゴルフの話では以前に2年続けてホールインワンを出した小林君が、また今年イーグルを出したとの事、しかも白内障で片目だったとの事ある同期生は両目の白内障手術をして以前より良く見えるようになったと話もあつた。また60才代後半に運転免許を取り最近夫人と共に欧州三、四ヶ

国をレンタカーでドライブ旅行をした話とか、また文化センター関係でシャンソンや仏像造りを楽しんでる等の話が出て筆者のようにに家内と杖に支えられて同行した者にとつて羨ましい話が多かった。

次に関西の話題、京阪奈学研都市にある各研究所における未来をめざす研究テーマ等についてのメモを見ると、去る10月1日開所した国際高等研究所(理事長は元京大総長奥田東氏、所長は元総長岡本道雄氏)でまた企画委員会副委員長に国立民博教授杉田繁治氏(35卒)も参加は「人類の未来と幸福」のために「何を研究すべきか」を研究する、言わば課題探索形の基礎研究所である。当面の主題研究テーマは「理論生命科学(脳と心、遺伝と進化等)安全科学(個人集団、国家の安全理念)また基礎研究では数理科学と哲学である。実験施設は一切なく、国際的な学者の自由研究交流の場を中心とする若い学生を含む学者村である。注目すべきは自然科学の流れは物質から生命、更に精神(脳)の研究へ向っている生命科学の時代を迎えたことである。

また学研都市で過日環境問題に関するシンポジウムが開かれた。これはRITE(地球環境産業技術研究機構)主催で、この問題解決に向け新しい発想技術を開発す

迎 春

一九九四年一月一日

**muRata**

株式会社 村田製作所

取締役社長 村田 泰隆

株式会社 電気評論社

財団法人 近畿地方発明センター

財団法人 応用科学研究所

京都大学 洛友会事務局

るため、地球温暖化の原因となるCO<sub>2</sub>の削減技術やオゾン層を破壊しない冷媒の開発、CO<sub>2</sub>の固定化、砂漠保全問題等がテーマになっていた。尚学研都市には既に関西電力や国際電気通信基礎技術研究所外多くの研究所で先端的研究が行われている事はご承知の通りである。

京都は本年建都千二百年を迎え1月から12月まで多くのイベントが行われる。歴史には栄枯盛衰がつきものであり、政治経済文化もその時代と共に繁栄し、時には消滅し新しいもの変っていく。京都の経済産業界も戦後ユニークなベンチャービジネスとして成功し、現在も活躍中であり、その後ベンチャーブームが終りかけたが、後継者による第二次ベンチャー時代が来た。現在は平成不況で低迷を続けているが、今こそ人の知恵、知識、技術を中心とした全く新しい分野の次なるベンチャーの誕生が期待されている。

現代はモノの充足から心の充足へと価値感が大きく変わろうとしている時であり、都市の条件も大変化する筈である。建都千二百年の節目を迎え関西国際空港、関西学研都市等大プロジェクトが進行している。京都も高速道路や高層ビル等の整備が進んでいる。21世紀の京都が魅力的になるためには以上のプロジェクトを生かすソフト

ウェアの確立が欠かせぬ条件である。

母校京大は一八九七年創立され、後三年で創立100周年を迎えるが、将来構想検討委員会が既設学部の枠を超えた独立大学院総合エネルギー科学、生物生命科学、多元価値総合政策(地域研究)の三独立大学院の設置と吉田、宇治に次いで三番目のキャンパス移転を内容とした基本構想をまとめた。(11月19日付)場所は京都南部地域が有力の由である。

序でに最近の太陽電池利用の話題に触れると、ソーラーカーレースが国内外で行われており、特に豪州縦断レースで所要時間でも、平均時速でも日本の車がトップになった。ちなみに太陽電池単結晶の最高効率率は15%になった由である。また太陽電池と発電電力を交流に変換するインバーター、余剰電力を一般配電線へ逆送電出来る住宅用ソーラー発電システム(3kW)が最近発売されるそうである。

また前の会報にも既報の通り京大超高層電波研究センターの松本教授が中心となり、マイクロ波による空間送電システムの模型飛行機実験や関西電力等の共同研究で親子小型ロケット間の宇宙送電実験も昨年実施され宇宙送電の実現性を実証し、更に地上でも離島送電その他多様な利用法の研

究が進められている。

最後に京洛だよりについて簡単に述べる。ご承知の通り京都では国際会議の開催回数は日本一である。(東京、神戸、名古屋が続いている)その会場である洛北宝池の京都国際会館へのアプローチは若干不便であるが、愈々地下鉄烏丸線の北端北山駅からの延長工事が着工される事になった。もともと完工は二、三年か、と思われる。また御池通りの東西線(西端の二条駅から三条京阪を経て京阪電鉄との共同で山科駅を通り南端醍醐駅まで)も主として御池通りの工事が進行中である。

次に景観問題で高層ビル(最高60米まで)としての京都ホテルも愈々本年7月頃完成予定であり、一方JR新京都駅ビル(高さ598m東西480m規模は旧駅の約10倍)はコンコースの東側にコンベンションホテルや劇場、文化施設等、また西側に複合商業施設、駐車場等(事業費約一千億円)完成は平成8

年秋の予定で着工された。それまで駅北部の烏丸口は観光客や市民にも不便極まる状態で、京都駅で乗降りされる皆様も随分戸惑われる事と思う。この駅ビルはその北部の保全再生地域と駅南部の開発活性化地域との接点となり、京都の顔として役割をもつとの地元の方や各業界の期待は大きい。

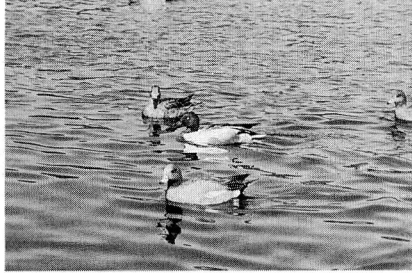
昨春秋に京都岡崎公園にある市立美術館は開館60周年を迎えた。昭和天皇の即位式が京都御所で行われたのを機に、市民の寄金10万円を着工され、昭和8年(一九三三年)完成した。一九二六年に開館した上野の都立美術館に次ぐ全国二番目の西の文化の殿堂として多彩な活動を続けて来たが、戦後米軍に接収され一九五二年市に返還された。所蔵美術品は日本画、洋画を中心とする一五〇〇点、その内の珠玉名作の展示が10月に行われた。尚その前にある平安神宮の大鳥居を狭んで位置する京都国立近代美術館の斬新な4F建の建物では上野の近代美術館系の美術展その他があり、筆者も月に一回位は杖を頼りに鑑賞に行く事が多い。ただ市立美術館は建物設備も古く、筆者にとつて腰掛ける椅子が少ないことが難点である。

洛友会の会合等でよく合唱される琵琶湖周航の歌で知られる京大ポート部の伝統行事琵琶湖周航を復活させようと同部OB等が資金を集めて当時のフィックス艇を新造復元し昨年9月大津で進水式があった。旧制三高時代(一八九三年)に周航が始ってから丁度100周年になる。尚この歌はポート部員の小口大郎の作詩と言われている。京洛だよりの最後に筆者の撮ったスナップ写真三枚を載せておく。

①は筆者の家に近い岩倉の長谷八幡宮鳥居前の雪景色(昨年2月)  
②は洛北深泥池の鴨(昨年3月)  
③は永観堂の紅葉  
本稿は筆者にとつて一年振りの執筆となったので誠に長文になったが、時間があればひろい読みして頂ければ幸いです。



①



②



③

第二部 洛友会総会巡りよもやま

昨年(平成5年)は会報で述べる機会がなかった。ここで筆者が出席させて頂いた各支部総会のよもやま話を思いつくまゝに述べたい。

先づ北陸支部総会(4月17日富山市料亭銀鱗にて)では野村精二氏(24年卒)から川端昭氏(28年旧卒)に交替された。筆者から北陸地域は太平洋岸から離れている事等話した節、森本芳夫氏(16年卒)(北陸電力会長で一昨年秋勲一等瑞宝章を受賞された)から富山は日本の中心に在り、また会場の銀鱗は富山駅と富山空港との中間にある生魚料亭で、東京から空路一時間で来られる等お元氣なPR発言があった事を憶えている。次に東京支部のお世話で5月21日支部総会と本部総会が目黒の八

芳園で開かれた。支部総会では支部長交替(重本直三氏(27年卒)から武藤良介氏(28年卒))があった。例年通りの活発な支部活動の報告があり頭の下る思いで一杯であった。また米寿の祝賀を受けられた藤宗寛治氏(13年卒)(本年81才になる筆者と同期で海軍の依託学生)は矍鑠そのもので、現在でも支部のテニスの会の会員や電気評論の編集委員としても十数年皆出席、更に同誌の連載講座を執筆中である。もともと総会当日正装で若干緊張気味なスピーチがあり、その後の懇親会では連載中の「雷電の話」等で多数の会員に囲まれ話が尽きなかったようであった。また例年ゴルフの話が出る高木正氏(11年卒)から昨年話したエイジスコア達成の目標はもう無理だから、今度は4日間連続4チャン以上を目標に頑張るとの元氣な話があった。

尚支部総会後の本部総会では、新副会長として大嶋幸一氏(19年卒)関西支部池上丈夫氏(22年卒)東京支部また会長として筆者の留任が決った。尚筆者は有病息災ではあるが健康上の問題で(前の総会の席上同様二、三期位で退任したい旨申し上げておいた。九州支部総会(5月28日ホテルステーションプラザ博多にて)では支部長上田弘之氏(27年卒)が総

会出席者増加対策としてのご苦勞(先づ立食の開会パーティー、熊本地方の自作スライドによる紹介更にテーブル形式の懇親会での自己紹介等)に感心した。翌日は眞栄城朝章幹事(38年卒)の案内で最近完成した福岡ドーム(天井の開閉式)の見学を予定していたが、見学時間と筆者の帰洛出発時間の関係で中止し、福岡県立美術館を観賞した後新幹線ひかりで帰洛した。

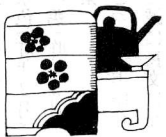
四国支部総会(6月11日高松新常盤にて)では本部新顧問阿部要氏(8年卒)(前顧問渡辺兼雄氏(大12年卒)と交替された)や近藤耕三氏(28年卒)(四国電力新社長に就任された)その他新会員の板谷良平氏(28年卒)(母教室を定年一年前に退職し新居浜工業高専校長に就任)その上米寿を迎えられた安堂勝年氏(特別会員)を含め40名以上の出席者があり(例年会員数の1/2以上の高出席率である)大広間での総会で船越孝夫(22年卒)支部長の話等があり、最後に会員肩を組んで旧三高の歌を合唱して別れた。翌日は最近新装成った高松市美術館を観賞後JRMリンライナーの最後備席(往路は最先頭席)で瀬戸大橋の景観を楽しむ事が出来た。

最後に関西支部総会(7月3日ホテル京都京阪にて)では、支部会則一部変更(支部長任期を二年から一年とする等)が決定され、支部長は森井清二氏(24年卒)から藤島啓氏(25年卒)に交替された。懇親会での森井支部長のスピーチの中で紹介された電気学会の創設者で二代目会長志田林三郎氏(初代会長は榎本武陽氏)の生涯(百年前に高度情報化社会が見えていた天才)の紹介があった。筆者もその後入手した未来予測の記事を興味深く読み下した。尚当日は欠席されたが、高令会員本部顧問である芦原義重氏(大13年卒)は月二、三回の公務上京の外、ゴルフも時々ハーフラウンドぐらいされる由伺った。

最後に関西支部総会(7月3日ホテル京都京阪にて)では、支部会則一部変更(支部長任期を二年から一年とする等)が決定され、支部長は森井清二氏(24年卒)から藤島啓氏(25年卒)に交替された。懇親会での森井支部長のスピーチの中で紹介された電気学会の創設者で二代目会長志田林三郎氏(初代会長は榎本武陽氏)の生涯(百年前に高度情報化社会が見えていた天才)の紹介があった。筆者もその後入手した未来予測の記事を興味深く読み下した。尚当日は欠席されたが、高令会員本部顧問である芦原義重氏(大13年卒)は月二、三回の公務上京の外、ゴルフも時々ハーフラウンドぐらいされる由伺った。

以上で支部総会巡りの話を終えるが、ここで任期を終えられた前支部長東京の重本直三氏、関西の森井清二氏、北陸の野村精二氏のご在任中のご苦勞に対して深謝申し上げると共に、総会に筆者が出席させて頂いた節お世話になった各支部の幹事の皆さんにも心からお礼を申し上げる次第である。終りに会員の皆様の益々のご健勝とご活躍、ご多幸を重ねてお祈りすると共に、本部支部役員各位のご支援ご協力を深謝し、かつお願い申し上げて擲筆する。

(平成5年11月22日記)



教室だより

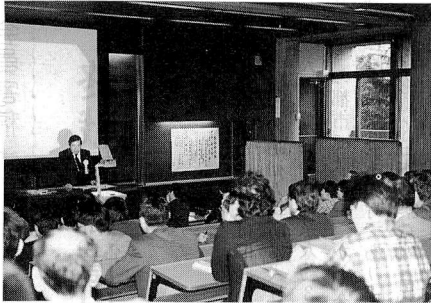
電気系教室懇話会

秋の講演会並びに懇親会

恒例の秋の講演会ならびに懇親会が10月22日(金)の午後、電気総合館講義室および総合人間学部(旧教養部)生協吉田食堂で開催された。第一部講演会には、本年は電気系教室の大先輩である池上文夫名誉教授(昭和22年卒)、シャープ(株)藤本一郎専務取締役(昭和28年卒)、第二電電(株)千本倅生専務取締役(昭和41年卒)の御三方にご講演をお願いした。

まず、池上文夫名誉教授には「通信における技術と人間」というタイトルで講演いただいた。技術が人間に及ぼす弊害という観点からみれば、通信技術は比較的影響の少ない部類に属するが、それでも、電話公害、電話線やテレビアンテナによる景観破壊、製造に伴う環境への影響など、技術の無頓着、独善に起因する問題が無視できなくなっている点を指摘された。「いつでも、どこでも、だれとでも」という通信の究極目的を実現する方法として、先生が提唱されている移動メッセージ通信に

ついでの説明があった。簡単なアロハ方式を用い、1Kbytes程度の短いメッセージを1Mbpsの速度で送ることにすれば、1ゾーンあたり加入者数66万人、加入者当たりの占有帯域3.6Hzという非常に安価で有効なシステムが実現できることを説明された。



つぎに、藤本一郎専務取締役から「平面ディスプレイの技術動向」という題で、マンマシンインターフェースにおいて重要な地位を占めるようになってきた液晶を中心としたディスプレイ技術についてお話しいただいた。

平面ディスプレイの各種方式に関する概説にひきつづき、液晶ディスプレイの駆動方式や表示形式による分類について述べられた。単純マトリクス駆動方式はコントラストにおいては劣るものの、構造が簡単で安価なため、電卓の表示などに広く用いられるのに対し、1ドットごとにトランジスタを用いるアクティブマトリクス駆動方式はコントラストが高く見やすいが製法がむずかしく高価なため、コンピュータのグラフィック表示などの高級な製品に用いられるに留まっているとのことである。大面積のガラス基板上に数ミクロンの素子を多数集積し、そのすべてを欠損なく動作させるためには、

超LSIに匹敵する技術が必要とされるが、現在、HDTVのプロジェクタに用いられる液晶パネルには実に130万画素が集積されているとのことである。

一九九七年頃までに、液晶ディスプレイが従来のCRTを凌駕し、その市場も二〇〇年には2兆円規模に達するという予想とともに、液晶の将来への課題として、低コスト化、高信頼性化、広視野化、大画面化をあげられ、将来は40インチのパネルも出現するとの予想を述べられた。

なお、ご講演中、様々の液晶ディスプレイのサンプルを回覧していただいた。

最後に千本倅生専務取締役より「21世紀の電気通信事業の将来性について」という題で、第二電電(DDI)の設立の経緯と今後の経営戦略についてお話し願った。

一九八四年DDI設立当時、日本の情報通信のサービスレベルは通信事業の独占体制のため、米国に約10年遅れていたが、この事態を打開するため、新しいビジネス観に基づく民間企業の創業を決定され、実行に移された経緯を語っていただいた。特に、いわゆるEstablishmentや行政の許認可権との葛藤について興味深い話を伺うことができた。

学生諸君に対しては、技術者と

しての道ばかりではなく、ハイテク経営の分野にも目を向け、活躍の場を見出し出して欲しいと語られた。また、フルブライト奨学生としての滞米経験や、毎年、ビジネススクールで教鞭をとられる経験を踏まえて、日米関係、日本人の国際感覚についても言及された。

将来の事業計画として、PHIとREDIUMの話がされた。PHI(パーソナルハンディホン)は現在のコードレス電話と携帯電話を一体化したようなもので、システムの単純化により携帯電話より安価なサービスが提供できるものである。また、REDIUM計画は66個の低軌道衛星を用いた全世界的携帯電話の計画である。

講演後、多くの質問、意見が出されたが、特に、企業のスピリットを維持する秘訣は何かとの質問に対しては、どのような組織においても、そのトップが構成員全員に対し、現在の組織の目標を明確に提示することが大切であるという答をいただいた。

第二部においては、電気系の大学院修士、学部の学生代表諸君に就職と大学院進学の実験談をお願いした。修士2回生長谷川利道君(東芝)、山田勉君(日立)、吉田明生君(東レ)、4回生石田有作君(関電)からそれぞれ就職先を決める経緯、会社訪問の印象、就職担当

教授とのやりとりなどについて報告していただいた。4回生花登弘和君には修士課程入学試験に向けての勉強法について話していただいた。

第三部懇親会は吉田生協食堂の1階部分を借り切って午後5時30分より開催された。佐々木昭夫電気工学教室主任ならびに藤島啓洛友会関西支部長村田製作所顧問から挨拶をいただいた後、池上文夫名誉教授に乾杯のご発声をお願いいただいた。2時間たらずの短かい時間ではあったが、賑やかで楽しい懇親の場をもつことができた。

本年の懇親会には池上文夫、林宗明両名誉教授をはじめ、企業からも20名以上の先輩の参加をいただき、学生、教官、職員を含め講演会には80名以上、懇親会には140名以上の参加を得て、有意義な行事を終えることができた。

末筆ながら、懇親会行事のためにご多忙中にも関わらずご講演を快くお引受けいただいた3人の講師の方々、就職、進学体験談を披露してくださった学生諸君、ならびにこの行事に参加いただいた諸先輩の皆様には厚くお礼申し上げます。

(昭和50年卒 北野正雄記)

会員寄稿

終戦時の憶出(工場設備撤去)

和田寿太郎 (昭10卒)

昭和10年卒業と共に私は旧満州に渡り、鞍山の昭和製鋼所に入社した。人口約20万(内日系人約3分の1)の都市ではあったが、大陸では唯一の製鉄所の町であり、文化水準も高く日本の製鉄所と異り、近くに貧鉄ながら鞍山を持ち(石炭は無順炭砒)終戦当時は実に東洋一出鉄量約二百万トンを誇っていた、当時の東條首相が激励に来たものである。またこの貧鉄処理は京大出身の梅根常三郎博士が磁力選鉄を開発されて富鉄となし、熔鉱炉に投入して立派な銑鉄を生産し、今日までその方式が継続されている。

入社以来私は所内各所の電気設備の企画、設計、建築等に掌ってきたが今回は戦後のソ連軍による工場設備の撤去についての憶出を書くとする。

昭和20年8月敗戦が決つたものの我々従業員約四万五千人(内地本人一萬五千人)はそれまでと同じように工場に出勤した。しかし間もなくソ連の特殊部隊が進攻工

場を占據、その支配下で一応従来通りの操業が続いた。しかし驚いたことに9月初、突如として操業がストップされ、直ちに主要設備の撤去積出發送が命令された。もちろんソ連での再利用が目的である。製鋼所全体の各施設を日本人技師10名程で分担指揮し、それぞれにソ連の将校が配属されて二人で共同責任者となって作業を遂行するわけである。

私は早速発電所の担当となりタービン発電機4台(二万キロ2台、一万キロ2台)送風機4台各五千キロ(ボイラー10缶(30、60トンの撤去梱包貨車積込みを約1ヶ月程で完遂するよう指示された。工場全員が捕虜のようになった今全く命がけの仕事であり、日本人は積極的に従事したが中国人は全然顔を見せなくなつた。幸に現地

の除隊兵なども加わり、電気(受電水道ガス等工場内の作業に支障はなく順調に進んだ。発電設備はなかなか厄介な構造ということが据付けならぬ期限付

きの撤去作業を命ぜられてつくづく判つたような気がする。立体構造が複雑で他の製鉄用機器と比べてもまた一段と特異な一面を持っている。それだけに指定期間内に作業を遂行するためのスケジュール、人員配置、用具、配車等の準備、安全、危険防止等慣れない仕事に献身的な奉仕をさせられた。

発電機、タービン、復水器、ポンプ等はブロックであるから問題ないがボイラーは解体である。一番の難点はスチームドラム等に接続する熱水、蒸気管の切離しである。私はドラムの手前でパイプを全部バーナーで切断させ、まとめて包装出荷したがソ連部隊からは何の異存もなかった。

設備全体に対して不思議なことはソ連将校から撤去について細かい技術的な指示がなかった。殊に再利用について必要と思われる設備の実績、各種指導案内、仕様、図面などについて何の要求もなかった。受入側にこのような経験者が待機しているために進攻部隊は単に設備を見落しなく撤去、運搬させる監視役だったように思われる。

毎日のスケジュールは現場指揮だけではない。毎夜8時から約2時間本館の事務所で工程会議があつてソ連将校と同席で当日の遂行状況を上官に報告してよく怒られ

た。(日本人通訳付き)発電所の総トン数は三千トン位だったと記憶するがこれを日割した撤去トン数を義務づけるのだから不可解である。同行の中佐殿とも現場よく言い争つた。ロシア語は判らぬし下手な英語でどうにか理解し合つたように記憶する。

撤去期間中は日本人みんな随分危険な思いをした。日本国内の製鉄所と違い昭和製鋼所の構内は随分広い。(ソ連の放棄場があったその構内の方々にソ連の兵士が駐屯して監視していた。また鉄砲を担いだ2名1組(女性もいた)の兵士が構内を巡視していて夜などよく威嚇されたものである。

9月も下旬になると現地はかなり涼しくなるが、何しろ捕虜のような絶対命令なので私は責任上家庭に戻らず現場事務所のテーブルの上で毛布にくるまって夜を過した。これを知つたソ連将校が期間中2回車で私の家を行訪問してくれた。また食事を毎日ソ連の将校食堂で提供して頂いて同中佐の厚意に感激したものである。

私は命を受けてからソ連将校の助言協力、日本人全体の努力のお陰で予定より10日程早く撤去を完了したため、さらに製鋼工場の付設小型ボイラー5基の撤去を命ぜられ、これまた予定通り終了して責任を果たすことが忘れられない。



撤去期間中はソ連部隊が駐屯していたので市内の交通機関はストップしていたがどうにか治安は保たれていた。ガソリン部隊が撤去終了と共に撤退し、我々日本人は街の人も含めて国家の保護もない、たよりどころのない生活に入ったのである。以後はまた別の機会にゆずるとして当時蒋介石総統が「暴に報ゆるに暴を用いず徳を用いよ」と宣言した由、中国人の儒教に基く寛容さは、すでに50年経過した今日も脳裡に残っている。

(一九九三年11月記)

支部だより

東京支部

恒例の見学会

東京支部では恒例の見学会を10月15日(金)に実施しました。今年には永安弘氏昭和16年3月卒にお手数をおかけして、日産自動車追浜工場の見学をさせていただきました。当日はやや薄曇りではありましたが、総勢61名の参加者がありました。

日産追浜工場PR館の中村館長から日産自動車におけるクルマ生産の現状やリサイクルの容易さを考慮したクルマ作り、さらには研

究所における塗料、代替エネルギー等の将来技術の開発について、懇切かつユーモラスなご説明をいただきました。その後、2班にわかれ、ロボットを駆使した自動車の組立ラインや在庫をぎりぎりまで切り詰めるべく自動化された船積み用の保管倉庫などを見学することができました。

見学後、わずかな時間ではありましたが、再度PR館にて懇談する機会があり、みなさんから詳細にわたる活発な質問が飛び交い、中村館長もたじたじの態でありました。幹事一同、諸先輩方の知的好奇心の豊富さに舌を巻くと共に、技術の話がされる時の皆様の若々しい目の輝きには恐れ入るばかりでした。

東京支部総務幹事

嶋谷吉治(昭49年電2卒)

東京支部旅行会報告

東京支部では恒例の旅行会を、10月24日(日)に実施しましたので、概要を報告いたします。

当日は、快晴の旅行日和のなか57名のご参加(内21組は家族で参加をいただきました)。

9時に池袋に集合し、西武鉄道



の特急レッドアロー号にて、快適な電車で都内より秩父まで移動しました。その後、マイクロボス3台に分乗して、西武長瀬ホテルに行き昼食をとりました。

昼食の後はいよいよ、第1のイベントである、長瀬ライン下りです。秩父長瀬の渓谷を流れる、京都の保津川に似て青緑色の荒川の上流を、時にはゆつたりと、時には速く、約25分間の川下りを楽しみました。

その後、再びマイクロボスに約40分間乗り、東秩父村にある、和紙の里に行きました。和紙の里では、第2のイベントである和紙作りの体験を行いました。すいた2枚の和紙の間に、もみじの葉やコスモスの花をはさんで、オリジ

ナルデザインの和紙を作るのです。が、皆それぞれに工夫をこらして、約1時間の和紙作りを楽しみました。

帰りも特急電車で、池袋に予定通り午後6時41分帰着し、無事解散となりました。

写真・長瀬ライン下りの乗船風景

景

(昭50卒会計幹事横川文彦記)

関西支部

家族見学会報告

恒例の洛友会関西支部の家族見学会ですが、本年度はさる11月3日の文化の日開催されました。今年には20年ごとに執り行われる遷宮祭を終えた伊勢神宮をお詣りする企画でした。

上は昭和2年の講習所卒業の方から、下は平成3年卒のフレッシュな会員まで、総勢170数名ものご参加を戴きました。企画の関係からか、今回はお子様の参加者が5名と若手少なく、比較的落ちついた雰囲気の家見学会だったと思います。

昼食時には鳥羽のホテルの大広間に参加者全員が集い、同窓の方や恩師とご歓談いただけました。毎年文化の日は晴天の確率が高

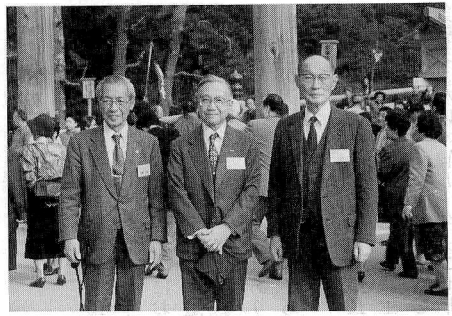
いといわれています。当日も穏やかな小春日和に恵まれ、装い新たな白木の社殿や、無電柱化で修景されたお祓い町がいつそう映えて見えました。

伊勢神宮には関西支部からもお供えを奉納しました。その際、洛友会副会長の近藤文治先生と関西支部長の藤島啓氏(村田製作所常任顧問)が、正殿内にてお浄めをお受けするという荣誉にあづかりました。

遷宮祭直後ということもあって、この季節にはは参拝者が例年になく多く、参加者の事故や迷子などが懸念されましたが、皆様のご協力で全員無事帰途につくことが出来ました。

伊勢自動車道の全線開通で、伊





### 中部支部 家族同伴秋の例会

(日本最高地の山城・岩村城跡と明智町・大正村に大正ロマンを尋ねる)

11月13日(土)中部支部秋の例会  
この会は雨の降らないのが自慢  
♪だったのが、今年はやはり異常  
気象か、昨日までの秋晴れが一転、  
今にも降り出しそうな曇り空、  
「午前中、岩村城跡まではなんと  
かもちますように」と祈りながら  
参加者26名地下鉄藤ヶ丘に集合、  
バスに乗り込みました。途中、多  
治見で2名合流、中央道からは御  
岳山は見えませんでした、そこ  
ここに展開する紅葉を愛でながら、  
バスは順調に恵那ICまで飛ばし、  
岩村入り口の阿木川ダムで小休止。  
ダムは最近完成した多目的ロック  
フィルダム、洪水調整用とかで水  
は少ないが、素晴らしい景色です。  
ダムから約10分、懇親会場、岩村  
山荘に到着しました。城跡は海拔  
721米、(ここ岩村城下)との高低差  
は180米、山荘のマイクロバスに乗  
換え日本最高地の山城にのぼりま  
した。岩村城はNHK大河ドラマ  
「信長」で一躍有名になった織田  
・武田勢力の接点、信長の伯母の  
嫁ぎ先です。武田方に付いた伯母



(関西支部会計幹事 馬淵恭樹  
昭54卒(株)村田製作所勤務記)



遅れの戌年、本多さんを目標に頑  
張っている」に続き、昭和20年・  
磯野、高井両氏、昭和32年村上、  
村瀬両氏も戌年と本日参加会員の  
半数近くが戌年とは単なる偶然か  
来年(戌年)はきつと良いことがある  
。本多さんの百歳達成は間違い  
なしと一同確信した次第。  
懇親会を終え、またバスに乗り  
次の目的地、明智町・大正村へ、  
ここは戦国武将明智光秀の出身地、  
八王子神社、柿本人麻呂社等があ  
る。光秀が人麻呂をまつたとい  
う事も解る気がします。

愛知県犬山に「明治村」金沢に

「江戸村」がありますが、ここ大  
正村は静かな山あいの町、明智町  
にあり、かつて蚕糸を地場産業と  
していた頃の姿そのままに風俗、

建物もまた大正時代のたたずまい  
を残しています。明治村や江戸村  
のように移築したのでなく、生活  
文化、建造物、そして町並みや風  
景や人情まで含めて町ぐるみの日  
本大正村です。開村は昭和58年、  
初代村長は高峰美枝子、村会議長  
は春日野親方です。大正村資料館  
は明治末期の建築でこの地方の城  
にも匹敵する町のシンボル「銀行  
蔵」と南隣の「大正の館」(この  
地方の名門橋本邸跡を含む一郭  
に在り、昔懐かしい蓄音機など大  
正ロマンを偲ぶ資料が一杯展示さ  
れています。



見学コースは北、南、と歴史コ  
ース、全部をまわるのは時間不足  
会員は年齢、好みに合わせ、三三  
五五町並みを散策、当時をしの人  
でいました。とうとう心配してい  
た雨が降り出しました。しかし全  
員雨具は用意しています。降られ  
るのを覚悟した今日の行楽会、こ  
の程度ですんだのはやはり皆さん  
の心掛けがよいせいでしょうか。  
帰りは瑞浪インターから雨の中央  
道を一路名古屋へ、途中若干の渋  
滞はありましたが予定時間を少し  
オーバーして地下鉄本郷駅に到着  
しました。参加者一同秋の奥美濃  
路と歴史探訪を胸に、また、来年  
の再会を約しながら散会しました。

(昭26卒 石川進記)

### 卒業55周年記念

#### クラス会 (昭13卒)

去る10月3日より一泊二日で能登半島一周のクラス会があった。総員15名(内夫人4名)。何分卒業55周年(ほぼ傘寿)の一行のこととてよく集ったと思う。

まさに今ラグビーシーズンである。その昔農学部前のグラウンドで楯円球を追い走り廻っていた若かりし日のことをふと思い出した。このフイティーンと言う数字は私には何とも懐かしいのである。

集合は午後1時JR北陸線高岡駅。全員無事集合し、バスは定期通り発車する。富山県から石川県へ山道で能登半島を横断し羽咋へ向う。山といっても能登では最高六百メートル程度で丘の林道を走り続けるという感じ。車窓からあすなるの樹木が目につく。この木は成長に年月がかかるが、楡より吸収性に優れ、香気があり建具や漆器の本地として珍重されている。羽咋を経て気多大社へ。尚社は石川県では最高の社格をもち、その背後に一万坪に余る原始林があり、神域として「入らずの森」といわれ一般人は

入山できない。何か神秘的で御利益のありそうな厳肅味のただよう神社であった。参拝を終え、バスはしばらく海岸沿いを走る。「朱鷺」が生息していたとされている眉上山を右に見て志賀町を経て景勝の地能登金剛に向う。

志賀町には車窓からは見えなかつたが北陸電力唯一の原子力発電所(出力54万キロ、沸騰水型)がある。静かな山村風景が続く。巖門に着く。海辺に波の浸蝕で作られた巖の洞門があり、メンバーの大多数は崖道を2、30米降りて行った。私は敬遠して崖の上から皆の証據写真を撮ったが、写真では人物が小さくて誰が誰だかは判別困難だった。次いでバスは富来町を経て総持寺へ向う。この辺一帯の海岸は奇巖が散在し風光明媚な景勝の地であり我々の目を楽しませた。またこの富来町はかの「岸壁の母」の歌で有名な女性の出生の地であるとか。海岸線から少し入ったところに曹洞宗大本山総持寺祖院がある。福井県の永平寺と共に僧侶の修行道場として歴史の古い名刹である。参道の石段を上ると先ず偉容を誇る山門があり正面に「諸嶽山」と書いた畳一枚分大の額が目に入る。仏殿、法堂、僧堂など何れも風格のある荘厳な伽藍が立ち並んでいた。中でも印象に残ったのは本堂の入口脇にぶら



参拝を終えバスは一路本日の宿泊地輪島のホテル高州園へ。ここは一番大きなホテルで専用の温泉をもっているとか。大浴場で旅の汗を流す。客室の窓からはらかなたの水平線にくざられた海面と空と浮雲が夕暮と共にうつり変わる色調、眺望はすばらしかった。

夕食時の懇談では一同疲れも見せず大谷氏の教室の近況報告を皮切りにテニスやゴルフ談議、病氣克服談、氣功の研究、中にはこの年でシャンソンを楽しんでいる話等話題は尽きなかった。「ゴルフ談議ではえてして自慢話が多い。そこで私が「最近のアベレージス

コアーは」との質問をしたところ、すかさず誰かが「それはプライベートルトに属することだ」とたしなめられた。また佐々木氏の中国で氣功術により白髪が見る見るうちに黒くなったという実演見聞談をまじえた「氣功の科学的研究」の話に皆の関心が集った。今後の研究の成果が期待される。

翌朝は6時モーニングコール。7時朝食、8時にはホテルをたち朝市に出かける。小一時間市場をぶらつく。魚貝、野菜、菓子、民芸品等々二百軒におよぶ店々が行き交う客を呼ぶ。我々が引き上げる頃続々とバスから降り立つ人々の群に会う。今や地元の市というよ

り観光客目的の市の様相に呈している。海豚の干物を買う。市をあとにバスは輪島塗の展示場に向う。ここでは工房もあり塗りの実演を見学する。何しろ百二十回も塗り重ねるとのこと恐れ入りました。展示場ではきれいな貝をあしらった百万、二百万円もする机や二、三十万円もするお椀等々ただただ目を見はるばかりの品々が並べてあった。

バスは次いで曾々木海岸へ向う。かの有名な千枚田に着く。一枚の田の広さは平均2坪弱とか。山の斜面を極度に有効に耕してあり、通称は千枚田であるがその実数は二一四枚もあるといわれている。しかし今やこの田畑は個人個人の手を離れ公共の観光田として作付けは各地からのボランティアによりなされている由。

やがて海岸のはるか沖合に七つ島が見える。この島々はバスが走るにつれ五つになったり四つになったり乗客の目を楽します。

バスは上時国家に着く。平清盛の義弟大納言時忠の子孫が住みついた豪壮な木造民家であり、平家の定紋「丸にあげは蝶」を金箔で描いたふすまに囲まれた部屋もあり、大納言の間は書院造りで、その格を示す縁金折上格天井、床の間の脇に金屏風があしらってある。土間には外出時用のかつぎ籠が四

卒業55周年記念  
クラス会  
平成5年10月3~4日  
所 能登方面(輪島高州園)

- 片岡富子
- 山口一枝
- 片岡吉子
- 副島敏史
- 国富住寿郎
- 小林四郎
- 山口喜博
- 大石泰之
- 佐々木正
- 山本三子
- 山本健彰
- 近藤善久治
- 山平晴子
- 大谷柳子

丁ぶら下げてあった。

さてバスは昨日とは逆に半島を西から東へ横断し宇津港に出て、しばらく海岸線を走る。ふと車窓から菅原神社が見えた。もし祭神が道真公とすれば九州と能登は何かゆかりがありそうだ。ガイド嬢によれば能登は昔から九州人との交流が盛んであったとの話からは辻褃が合う。そのあかしを示すかのように何と我々のバスの運転手は薩摩軍人で、ガイドは加賀美人なおこの運転手は西郷さんにそっくりであり、ちゃんと写真に二人を撮っておいたので念のため。

さてバスは海岸べりのレストランに着き、昼食小休止。食後半島中央を走る高速道路に入り、しばらく快適なドライブの後、千里浜に着く。ここは波打際まで車が走れるので有名で、この細かい地耐力のある砂は山から流れ込む川が運ぶ土砂により構成されており、総延長8・9キロにわたる海岸である。

しばしその感触を楽しみバスはまたもとの高速道路にもどり、一路旅の終着金沢駅に向う。内灘町で高速道路を降り市内へ。予定より30分程早く駅に到着。かくして全員無事旅を終え元気な姿での再開を約して解散する。

にこやかに疲れ切っている  
バスガイド(10月3日読売)

御苦勞様でした。最終に今回の旅は小林、片岡両幹事の行き届いた御世話の賜であり謝意を表して筆をおく。

(山本健幹事記)

「参加者氏名  
大谷泰之(同夫人)、片岡高示(同夫人)、國富佳寿郎、小林四郎、近藤喜久治、佐々木正、副島敏夫、平野彰、山口高雪(同夫人)、山本三千雄、山本健(同夫人)」

事務局所感

昨年末閣議に報告された「科学技術白書」は「若者の科学技術離れ」このままゆくと優れた理工学科系人材の供給源が枯渇してしま

うと、先端技術製品を使いこなす若者に、その背後にある科学技術の知識や科学者、研究者の活動が見えない。驚きや感動の対象とならなくなつた科学技術の成果が、若者の関心を薄れさせているようだ。

純粋な知的世界へのあこがれは、若者の心のなかに潜んでいると思いたい。若者の科学技術離れの要因として、  
1、研究者の処遇が低い。  
2、面白さが感じられなくなった。  
3、楽しさが青少年に伝わっていない。

などをあげている。

「研究者の育成と確保」についてアンケートをしたら、「指導してもらえない」、そのくせ「研究の手足としてこき使われる」といった研究現場の実態が浮かび上がる。学界も産業界も危機感をつのらせるだけでなく、経営戦略の再編・再構築(リストラ)にあたり、よくよく考え、対処する必要がある。今年平成6年度の景況は底割れ状況で推移、企業収益はますます悪化が予想される。リストラを進行させ中長期的な展望を進める年にしてほしい。

事務局だより

あけましておめでとうございませう。平成6年度は平成不況を吹っ飛ばす、明かるい楽しい洛友会活動になりますよう頑張りますので会員皆様のご協力よろしくお願ひ申し上げます。

昨年は不況くと市場経済も好転せず皆様のお会社も生き残り対策で大変でしたが今年は早期に政府の景気策が実をむすび良くなつてほしいものです。

平成5年度洛友会の主要ニュースは次の通りです。  
○板谷教授新居浜工業高等専門学校校長に転任。

○西川禎一教授京大工学部長に就任(任期2年)

○平成5年度教室主任に就任  
電気工学教室 佐々木昭夫教授  
電気工学第2教室奥村浩士教授  
電子工学教室 小倉久直教授  
○第34回藤原賞に高木俊宜名誉教授受賞。

○関西電気協会会長に森井清二氏(昭24卒)就任。

○洛友会役員改選、新任役員。  
顧問 阿部 要(昭8卒)  
副会長 大嶋幸一(昭19卒)  
副会長 池上文夫(昭22卒)  
幹事 岡田隆夫(教室常任)  
幹事 佐々木昭夫(教室)

○支部長の改選、新任。  
東京支部長 武藤良介(昭28卒)  
関西支部長 藤島 啓(昭25卒)  
北陸支部長 川端 昭(昭28卒)  
○電気系教室京大・阪大交歓スポーツ大会5種目京大全勝優勝。  
(6年ぶり5回目の快挙)

○平成6・7年用新名簿発刊。

今般発刊した新名簿の広告募集には各支部の役員特に幹事の皆様に努力していただきました厚くお礼申し上げます。お陰様で予定通り発刊できました。広告募集状況は東京76件(75)関西39件(55)中国37件(31)四国11件(11)九州5件(5)合計168件(180)で丁度平成元年度170件と同じになりました。特に

今般は中国支部が多額の努力を賜りました重ねてお礼を申し上げます。

今年度の洛友会主要行事は、2月5日(土)京都タワーホテルで開催予定、恒例の役員会(本部役員および9支部長で計画されます。また総会は関西支部と合同で開催予定です。詳細は会報4月号に記載いたします。以上

(事務局長矢木原邦雄記)

訃報

- 講大11 萬田元房 5.11.1
  - 講大12 瀧本重美 5.10.2
  - 講昭6 藤井知一 5.11.18
  - 昭7 長田普吾 5.9.2
  - 昭9 植田伸司 5.11.1
  - 講昭9 大園幸長 4.8.17
  - 講昭10 青柳清治 5.10.15
  - 講昭11 大楽二郎 5.5.19
  - 講昭12 久次良雄 5.10.10
  - 昭22 西村一郎 5.9.13
  - 昭35 辻 順一
  - 昭43 開高 徹
  - 昭45 東横良旺
  - 昭47 舛田光良 5.7.26
- 以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。